

---

# おやすみなさいの子守唄 改

香月薫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

おやすみなさいの子守唄 改

### 【Nコード】

N6295R

### 【作者名】

香月薫

### 【あらすじ】

人間亜種の欠落種族は、その種族が持つある能力のせいで、研究者たちに追い回されていた。

親を殺された欠落種族の少女羅江<sup>アノ</sup>は、運悪く木葉大学に捕まってしまう。しかし、人体解剖されそうになるところを助けてくれたのは、元幼馴染の研究者だった。

母親への思い、愛しい人への思い、そして、人間への思い。羅江はそれらを抱え、ただ歌い続ける。

## プロローグ 全てが始まる直前

『次のニュースです。昨日、岡山駅前で殺人事件がありました。死亡者は十名にのぼり、犯人は三十歳無職の何森<sup>いずもり</sup> 美江<sup>みえ</sup>容疑者です。また、容疑者自身もその際に自殺をしたようです。』

しかし、容疑者は刃物等の凶器を持っていなかったそうです。また、被害者の死因がいずれも脳死という極めて珍しい事件のため、何森容疑者は木葉大学精神科で死体解剖を受けるようです。』

\*\*\*\*\*

日本のどこか 木葉大学で、ある男が顕微鏡の画面を眺めていた。

「中村君、ちょっと来てくれ」

「教授？」

「この世界には、人間亜種 人間以外の種族がいた」

「どういうことですか！？」

中村は、その台詞に声を上げる。しかし教授は、部屋中にエコーのように響く大声を気にもしなかった。高まる興奮を抑えつけ、画面に浮かぶある細胞を指差した。

「これを見てくれ。何森 美江の髪だ」

「これは一体……」

心当たりか何かあるのか、または無さすぎたのか 中村は目を見開き、息を呑んだ。

「……不明としか言いようが無い。調べた結果、全ての人間にごく微量はあったのだが 何森姓の、特に女性に多く含まれていた」

人間の体はブラックホールのように謎に包まれている。私は、その謎の一つを解明出来るのかもしれない。教授の胸は高鳴った。この謎を、自分で解きたい。そんな思いが心を駆け巡った。

「この細胞による変化などはあるんですか」

「免疫機能が活性化し、精神力も桁外れに向上する」

この細胞は、どんな人間にも含まれている。気が付くと治癒している傷、怪我をしていたはずなのに無い傷跡などは、この細胞が影響している。あくまでも、彼の予想であるのだが。

「精神力……。桁外れに、といいますと」

「人間を殺せるほどだ。つまり、何森 美江はこの能力で殺人事件を起こしたようだ」

「な……っ！」

パリン、とガラスが割れる音がする。見ると、中村の足元には試験管の残骸があった。普段なら叱るところだが、仕方が無いと教授は思った。何千、何万回もの実験をした教授ですら、計算結果を見て愕然としたのだから。

「何森 美江は、事件のときに自殺している。データを集めたいのだが……」

まだショックから立ち直れていない中村を一瞥し、軽く息を吸うと口を開いた。

「各病院、警察などには協力を要請した。しかし我々は、この実験材料を活用したいと考えているので、マスコミには発表していないくれぐれも、口外しないように」

「は、はい」

教授はそう言って部屋を出ようとした。しかし、あることを思い出して後ろを振り返った。

「第一発見者は私だ。つまり、この種族に名前を付けることが出来るはずだ」

「そうですね」

「この種族は欠落種族だ。これからこのような犯罪が起きないように、種族の戒めとして、この名前を」

\*\*\*\*\*

遠い日の、記憶。

晴れた日の午前は風が快い。その風が一番爽やかに吹くところは、公園の木陰だ。しかし、そこには既に先客がいて、無邪気に会話を楽しんでいた。

「らえちゃん、今日は何をする?」

「おままごとしよー!」

「らえちゃんはおままごとが好きだね」

「うんつ。でも……のぶひこくん、他にしたいことある?」

「うんつ。らえちゃんとおままごとは楽しいから」

一際大きな風が吹いた。風は二人を髪を弄り、どこかへ駆けていった。

彼女たちはまだ幼く、何も知らない。この後、二人は離れ離れになっってしまう。また逢うとも知らず ……。

## 子守唄の音色（トーン）

少女は、立っていた。白人としても異様な肌の白さ。そして、真っ白い肌と反比例するような黒い髪。その髪は見ようによっては虹色にも見え、普通の人と比べれば遥かに長かった。

彼女の外見は、高校生になった程度の少女。しかし、それが彼女の種族の特徴であった。

「レイン……お腹がすいたんだから、仕方が無いよね。でも、あたしは何も悪くないのに、いつもいつも罪悪感に駆られるんだよ……」  
立ち尽くしたまま、哀しげに首を振る彼女は、腕の中のうす汚れたぬいぐるみに話し掛けた。

しかし、ぬいぐるみは何も言わない。ただ、哀しげな瞳で主を見つめるだけ。少女の腕の圧力で、ぬいぐるみの顔が歪んでいく。

ぬいぐるみのレインという名前は、彼女の母親が付けた名前だ。優しい雨が我が娘の哀しい運命を流してくれるように、と。

「とにかく、……血抜きはしなくちゃ」

軽く頷いた少女はぬいぐるみの頭を愛おしそうに撫でて、優しくアスファルトの上に置く。暗闇の中で、少女の息遣いと水音。それだけが響く。

しかし、しばらくするとドアが閉まる音がし、その瞬間から音と音と音が消滅した。

そうしてまた、いつも通りの朝が来る。

「空は高く青く澄んでいる。なのにあたしは部屋の中……」

これはこの地域の七不思議となっていた。澄んだソプラノの唄声が、廃墟となった屋敷から聴こえてくる。

勇敢な少年少女たちが訪れたこともあった。しかし、帰ってきた子供たちはそのことを誰にも話せなかった。その部分だけ、全員記

憶が無くなっていたのだ。

「どうしよう、お腹すいちゃった……。お腹がすかなかつたら絶対食べたくないのに」

声の主は、羅江（ロウカ）という。 何森 羅江。

羅江は手掴みで物体を口に入れ、噛んで飲み込んだ。そして顔をしかめる。

「ああ……。やっぱり人肉ってまずい。人間って雑食だもんね」

独り言を言う。もう、それは癖になっていた。ぬいぐるみ レインに話し掛けるという名目の独り言。

彼女は、自分が独りになったと心の底で気付いたときから、ずっと喋っているのだった。喋っている限りは独りにならない。だって、喋る相手がいるんだもの。そう自分を騙し続けているのだった。

「 どうしてあたしがこんな目に遭うの 」

歌声と一変した低い声で、羅江は窓の遠くの方の道を眺める。賑やかな学生、せかせかと歩く大学教授……。全てが輝いて見えた。青空から降り注ぐ、眩しい光を浴びて生きられることが 羨ましくて、憎かった。

あたしも、あんな風になりたかった。普通の人間として、平凡な人生を歩んで……。恋なんかも、しちゃって。どこからともなく風が吹く。割れた窓から入る風で、近くのカーテンが揺れる。

「……まま……」

その、声にすらならないほどの微かな囁きが無意識だったのかは本人にもわからない。

息を吸って目を閉じる。そして頭を大きく振ると、目を開けた。

その瞳に、先程までの虚無感はない。彼女の歌声のように綺麗で澄み渡った光。

この瞬間から、羅江は無邪気な女の子に徹する。それが無自覚にしろ、彼女は道化になる道を選んだのだから。自分を騙して生きることを決めたのだから。

「あれ？」

羅江がカーテンに付いた埃を払おうとすると、窓の下にちらりと何か映った。覗き込むと、黒っぽい物が落ちている。道に人はいない。ちよっとお洒落なタイル張りの道と黒い何かは、最初からそうであつたみたいで違和感が無かつた。

「何だろう」

階段を下りて重いドアを開けると、そこは外の世界。明るい太陽と透き通るような青い空が、真っ白い肌を突き刺す。彼女は、その明るさに思わず手をかざした。

「眩しい……」

少し考えてから部屋に戻る。目的の物は、少し探すと見つかった。埃を払って帽子を被り、そしてまた下へ降りる。

道路には、黒い細長い財布が落ちていた。振ってみると、チャリチャリと音がする。どうやら、中身は入っているようだ。中には、『壹万円』と書かれた紙が五枚と『千円』と書かれた紙が二枚。それと、小銭が数個。

「……お金、だよな」

お金　つまり、これで物が買えるってこと。それは、ある希望を抱かせる。

「やった、これで人肉食べなくていいんだ……！」

人肉はまずいし、やはり人間だから嫌だ。羅江としては豚や牛の方が食べることに抵抗が無いのだが、人間の方がそんなに騒がないし、不意打ちならすぐに殺せる。しかし、それはお金というものがあるだけで迷う必要が無くなる。

「最寄りのスーパーってどこだろう」

羅江は小さく呟き、記憶の中のスーパーへ向かうことにした。

「ふんふんふんふん」

こんな明るいときに外に出るなんて、何年ぶりだろうと羅江は考

える。屋敷に住み着くようになってから、家を出たのは夜だけ、しかも人を殺すためだけだった気がする。

『先日、木葉大学が欠落種族という種族の存在を発表しました。欠落種族は最近異常に減少しており、今はほとんどいないそうです。発見したのは二十年ほど前で、木葉大学の教授が第一発見者だそうです』

どこか テレビから洩れてきた、ニュースキャスターらしい女性の声が耳に届いた。欠落種族という単語に、思わず記憶がフラッシュバックしそうになる。ふらつと軽い立ちくらみ。

「だ、だめだめ。こんなんじゃ」

羅江は自分の肩を抱いて、スーパーに足を踏み入れた。

「えっと、カレーとご飯と、あとは冷凍食品かな……」

たくさんの商品を前にして目移りしていると、かごの中はあつという間にいっぱいになった。体に悪いとは思うけれど、料理のための設備も整っていない。さっきかごに放り込んだものなら、室温で溶かせば食べられる。

「お願いしますー」

重いかごをレジに乗せて、一息吐く。羅江は財布の中身を確認しながら、表示されていく値段を眺めていた。ちよつと入れすぎた気もするけど、お金が足りなければ返せばいい。

しかし、そんな呑気なことを考えている場合ではなかった。テレビで欠落種族のことは話題になっているのだ、自分に気付いてもおかしくない。多分、帽子を目深に被って、髪を中に押し込んでいたから気付かれなかったのだろう。肌だけを見れば、病弱な少女に見えるかもしれない。

羅江は顔を青くさせて、会計が終わるのを待った。買うだけ買ったら、すぐ家に戻ろう。そして、もう外には出ないようにしよう。値段を言おうと顔を上げたレジのお姉さんと目が合った。

「五千七百三十、その髪って……あなた、欠落種族？」

レジのお姉さんは目ざとかった。帽子から出ているほんの少しの髪を見逃がさず、それと欠落種族を結び付けた。瞬間的に、羅江はレジを飛び出した。

「欠落種族って、……あ、待て！」

隣のレジにいた中年のおじさんが手を伸ばしたが、羅江は軽くすり抜け、そのまま店の外へと走り出て行った。おじさんはしばらく唖然としていたが、すぐにかごを放り投げて追いかけ始めた。

羅江は、自分は小柄だと自認していた。二十五歳ほどだというのに、十歳は幼く見られる。だからそれを活かして、狭いところばかりを通った。フェンスの隙間、細い路地裏。しかし、撒けたと思ってもすぐにまた違う人と出くわす。

「向こうに逃げたぞ」

「捕まえる！」

羅江を追っている人間の声は、全然遠くならない。ふらふらと陽炎のように彷徨うのが周りの声なのか、それとも、自分の頭の中なのか、それすらわからなくなる。

「もう、疲れた……」

そもそも、彼女は普段外に出ないのだから、長時間走り続けることなんてできない。立ち往生したまま喘いでいるとある一人見つかってしまった、そこからは芋蔓式で、人間の群れに囲まれてしまった。

「さて、どうする？」

若い青年は彼女を睨み付けながら、張りのある声で言った。見たところ二十三歳ぐらいで、彼女は親近感を覚える。そんなことを考えるような状況じゃないというのに。

「警察に引き渡すのが無難じゃない？」

太つちよのおばさんは額から汗を垂らしながら男に言った。羅江は、だったらなんで追いかけたのと詰め寄りたくなかった。買い物を中断してまで追いかけたのは、井戸端会議の話題が欲しかったからに違いない。

「みんな、近寄るな。欠落種族は精神力が強く、人間も殺せるらしい」

誰かが発したその声で、人垣が一回り広がる。ひそひそとした話し声は、波紋のように感じる孤独感。

「そんな忌まわしいもの、早く殺してしましましょうよ！」

「そうだ、殺してしまえ！」

羅江はここで殺されることを覚悟した。しかし、人を殺した自分に微笑んでくれる神様なんていないと思った。地獄は住み心地の良いところだといいな……。そんなことをつらつら考えていると、凜とした声が後ろから響いた。

「待て！」

羅江は顔を明るくさせて振り返った。しかし、それはすぐに絶望へと変わる。期待した分、地獄の底に突き落とされたように感じた。

「欠落種族の少女を、我々に引き渡してください」

男は白衣を着ていて、胸には『木葉大学』と刺繍してあった。威厳のある声で、その人が木葉大学の教授だとわかった。欠落種族の第一発見者。この男のせいで自分たちはこんな目に遭ったんだと、羅江は唇を噛み締めた。

少しでも期待した自分を呪いたくなかった。口の中に鉄の味が広がる。

「ど、どうするんですか」

羅江を追いかけ始めた中年が、馬鹿丁寧に問う。教授は穏やかに笑い、その笑顔のまま恐ろしいことを口にした。

「実験です」

その台詞に羅江は息を呑み、その恐ろしさに拳に力を込めた。笑

顔の仮面を付けた男を人間とは思えなかった。

「実験のためなら仕方ないよな」

「私たちの町に欠落種族がいるなんて恐ろしいものね」

責任逃れのようにぼそぼそと聞こえてくる声。羅江は込みあがる怒りを抑えるために、わざと聞こえない振りをした。

「大丈夫ですよ、暴れなかつたら痛いようにはしません」

教授は顔に作り物の笑みを浮かべて近づく。自分のほうに伸ばされた手を反射的に払い除けると、教授の態度が急変した。

「下手に出たら付け上がりやがって……来い！」

問答無用で腕を掴まれ、腕に爪が食い込んで痛い。その痛さで脳が感情的になり、じわりと涙が滲む。教授の手を必死に振りほどこうと試みても、全く歯が立たず、却って彼のガソリンに火を点けるだけだった。

「嫌っ！ 助け、」

羅江が必死に叫んでいると、突然頭に衝撃を感じ、そのまま意識を失った。

## 子守唄の音域（コンパス）

羅江が目を覚ますと、猿ぐつわを噛まされ四肢を縛られ、動こうにも動けない状態だった。幸い窓の外は見えたので景色を眺めっていると、歴史のありそうな豪華な門が近づいてきた。そして、車はそこを通ると地下駐車場へと入っていった。

大学の実験棟に連れて行かれた羅江は、そこに並ぶ実験材料たちの姿に愕然とした。小動物たちの叫びは耳を塞ぎたくなるような現実だった。

「なんてひどいことを……！」

「この実験があつてこそ、ワクチンや治療薬が使えるようになるんだ。所詮は動物、替えなんていくらでもいるじゃないか」

彼女は言葉を失った。殺される為だけに生かされる動物たち。新薬の実験台になるのはこのいたいけな生物で、そして次々と死んでいく。病院のようなりノウムの空間に、動物たちの叫び声が絶え間なく響き渡る。死と隣合わせなんてものじゃない。死ぬほうがよっぽど楽　そんな世界に生かされているんだ。

そこまでしておいて、人間は何の感謝も無く、当たり前のように薬を使う。あまつさえ、その薬で自殺をしたりする。人間がここまでひどい生物とは思わなかった。自分達の贅沢のために、一体どれだけの動物を殺しているのだろう。

「入るんだ」

前を歩いていた教授は、周りのものより一際大きい檻の前で止まった。彼は羅江の肩を突き飛ばし、南京錠を閉めると部屋を出て行った。冷たい床のひやりとした感覚が、羅江の現実だった。

「やだ、出して！　出してよ！」

自分も、あんな風に殺されるのかもしれない。恐怖で二の腕が粟立った。

\*\*\*\*\*

ぼんやりと目の前が明るくなっていく。細部がわからない、ぼんやりとした声、映像。

「まま、うたって。おやすみなさいのこもりうた」

羅江の目の前にいるのは記憶に無い女性だったが、羅江にはそれが母だということがわかった。これは彼女の子供の頃の記憶だ。オブラートに包まれたように思い出せなかった、遙か昔の記憶。羅江は、その記憶を再生しているのだ。

「羅江はこれを聴かないと眠らないのよね」

穏やかに微笑む女性は羅江の理想の母親像で、あまりにも優しいその表情に、瞳から涙が溢れるような錯覚を起こした。しかし、羅江はこの幻の中では傍観者でしかなく、自分と母はどんどんやり取りを続けていく。

「このうた、だいすきな。ねえ、うたって」

すると、母は口ずさむように軽やかに唄い始め、羅江は愕然とした。その唄は、羅江がいつも唄っている唄に違いなかった。心地よい音に羅江が目を閉じると、ポタージユのような優しい思い出に包まれた。

「羅江」

落ち着いたアルトの声で目を覚ますと、下には真剣な顔の母がいた。羅江は、睡眠を邪魔されたからか顔をしかめ、それでも健気に顔を上げた。

「なあに、まま」

「逃げなさい」

母の声はとても切羽詰まっっていて、とにかく大変なんだということがわかった。しかし、幼かった自分はそんなことには気付けず、

わけがわからないままに布団を握り締めている。不安げな瞳が母を見つめた。

「え、……どうして」

「すぐに追っ手が来るわ。私たちを狩りに」

追っ手？ 狩られる？ 誰が？ どうして？

昔の自分と今の自分の頭の中に流れる疑問符の羅列。意味がわからない。薄暗い部屋に豆電球のオレンジ色が揺れる。

「あなたは、生き延びないと駄目。私と彼の、たった一つの生き形見なの」

母は羅江の瞳を覗き込み、慈愛に満ちた笑みを浮かべた。あまりにも穏やかな母の笑顔に、彼女がどこかに行ってしまうような気がして、羅江の心に不安が渦巻いた。

「あなたは 私たちの希望なのよ」

「ママ、ママ……」

嗚咽を堪えた羅江は、複数の足が廊下の床を軋ませてこちらに向かってくる音を聞いた。足音を隠すような歩き方に彼女は身震いする。

「ほら、来たわ。隠れて」

母はそう言つと羅江を押入れに隠した。つんとカビの臭いが広がる。そして、足音はすぐそこまで近付き、勢いよく扉が開かれた。

「欠落種族を一名発見しました」

欠落種族。聞いたことが無いはずなのに、とても恐ろしい言葉だと思つた。羅江は恐怖のあまり、じつと息を殺すことができなかつた。声を出すなんてとてもできなかった。

「傷を付けるなよ。無事に木葉大学に連れて行かないといけないんだから」

「教授も物好きですよ。職業とはいえ、人間を研究するなんて

」

男の声が消え、場の空気が突然変わった。慌てた男の一人が上ずつた声を出した。

「こ、こいつ、舌嚙んだぞ。おい、教授に何て言い訳するんだ……！」  
体に針が突き刺さった。一直線に駆け抜けた衝撃は、確かに『母は死んだ』と告げていた。そして、その後の記憶は無い。

羅江を見つけたのが教授だったのは、何の因果だったんだろう……。

\*\*\*\*\*

もう、何日経ったのか羅江にはわからなかった。窓の無い部屋で一日なんていうものは無く、部屋では常に誰かが動いていた。残酷な実験は、まだ続いている。実験に髪が邪魔だからとバリカンを持ち出されても、抵抗しようとは思わなかった。既に羅江の心の中には諦めの感情が無い。

彼女の左腕には点滴が刺さっている。そこに送られている液体が何なのか。どうせ、ろくな物じゃない。どうせ、ただの実験だろう。死ももう目前に迫っているように気がした。彼女は冷たい床に座り、膝を丸めた。

突然、思考を一時停止させるほど大きな足音を立てながら誰かが来て、羅江の檻の前で止まった。血の気の引いた顔で、彼女に刺すような視線を放つ。

「これはどういうことなんだ！」

「どうしたんですか。何か不備でも……」

この部屋全体に響き渡るほどの大声に、小動物に注射をし終えた男の人が慌てて駆け寄る。部屋の中にいる動物たちが騒ぎ出す。

「何故この化け物は生きているんだ！」

自分が死んだら困るのはそっちじゃないかと思いつきながら、羅江は冷やかな目で彼を眺めた。教授ほどではないにしろ偉い人のようで、胸には小さな金色のピンが付いていた。

「あの、……何をしたのでしょうか」

「ちょっと目を離していた隙に、アルバイトが硫酸を入れたんだ」

一瞬、羅江の中の全ての思考が停止した。言葉だけが頭を通り抜け、その後意味が追いついた。

「ひ、……っ！」

そして次の瞬間、内容を理解した羅江は後ずさる。衝動のまま腕の管を引き抜き、呆然と彼を見つめる。

頭の中に浮かぶイメージ。硫酸が血管を溶かし、骨を溶かし、肉を溶かし、皮膚を溶かす。皮膚が溶けて、初めて見ることが出来る自分の中。でも、中にあるのは無。ただぼかりと何も無い空間があるだけ。そして、その周りには、焼け爛れた皮膚、肉、骨、血管。

羅江は無知ゆえに、そんなありえない想像を作り上げてしまった。

「まあ、お前の反応を見る限り、硫酸にも耐性があるようだ。結果的には良かったよ」

「あなたおかしい……狂ってる！」

「どこがおかしいんだ？ おかしいのは、硫酸を入れても死なないお前のほうじゃないのか」

薄く笑いながら言う目の前の男に、羅江の中の何かが外れた。音階の無い音が体を巡る。

お母さんを殺し、動物たちにあんな事をし、反省すらない人間たち。あたしが二十年間、あの屋敷でいたって平和に暮らして耐えていたのに、それをぶち壊しにした憎い人間。人間に害を与えるつもりも何も無いし、これからも平穩に暮らしたかった。それに、あたしは人を殺さないために外に出たのよ。なのに、この仕打ちは何なの！ こんな人間なんて、消えてしまえ、いなくなってしまう！

感情の激流。音という音を全て呑み込み、うねってうねって、大きくなつて 堕ちた。

唐突に鋭い破裂音がして、羅江は目を見開いた。

鮮血や内臓、筋肉と脂肪が飛び散り、小さな固まりとなって床に落ちる。頬に赤い液体が付いたのを、無意識に拭う。

「あたし、何をしたの……」

気がついたら彼女は檻の外にいた。足元には曲がった南京錠と、わずかに人の形をしているもの。腕や足が十数個。体からはピリピリとしたものが発せられていて、なんだかそれがひどく不快だった。

茫然自失している羅江を気に求めもせず、教授の部下らしき男が口を開く。

「はは……本当に欠落種族なんだな。硫酸を入れたにも関わらず何とも無かったのは、強い殺意だけで人を殺せたのは　ひとえに、お前が化け物だからなんだよ」

男は羅江には見向きもせず、自分に酔ったように説明を始めた。「ここでは欠落種族を解剖したことが二度ある。俺はその解剖を手伝ったが、満足な結果は得られなかった。すぐに死んでしまったからだ」

そして、不気味な笑みを浮かべて近づいてくる。悪意なんてものではなく、言いよりの無い変なオーラが、この男から滲み出ている。半径五メートル以内に近づきたくない。近づいたら、このオーラに汚染されそう。そう思わせるだけの違和感が彼にはあった。

「教授を手伝いながら、ずっと思っていたよ。欠落種族を解剖したいとな。今日、やっとその夢が叶うのだ」

男はすぐ側まで来たが、羅江は立ち尽くしたまま、ぴくりとも動けなかった。そして、精神面での抵抗も空しく、いとも呆気なく捕まってしまった。

意識が戻ると、彼女はあまりの眩しさに目を細めた。手術で使う

ようなライトが、視界いっぱい広がっていた。嫌な予感に周りを見ると、羅江の両足手首は固定されていた。冷たい器具が四肢を切りつけているようだ。

そして、台の側にいるのは、両手にメスを持っている白衣の男。鋭利なそれを目の当たりにして、羅江は顔面蒼白になった。

「嫌……」

無意識に拒絶を表す言葉が口をついて出る。今まで死んでもいいって思っていたけど、本当は死にたくない。羅江の目尻から涙が零れ落ちた。

「始めようか」

観念した羅江は目を硬く閉じ、全てを待とうと決めた。しかし、彼女が予想した感覚は訪れず、羅江は思わず目を開ける。そこには、男が訝しげな顔でさっきの状態のまま立っていた。

耳を澄ますと、なにやら足音らしき音が聞こえる。目の前の男が、一人では無理だからと助手でも呼んだのだろうか。しかし、その音はひどく切羽詰まっているようで、羅江は首を傾げた。

そうこうしているうちに部屋のドアが勢いよく開き、派手な音と共に、真面目そうな男が入ってきた。急いで走ってきたようで、息を切らして肩で呼吸をしている。

「原岡！」  
はらおか

「さ、崎本！ お前、なんで実験棟に……！？」

「アルバイトがおろおろしていて、聞いてみたら人体実験をしているんだってな。お前、自分が何をやってるかわかってんのか」

崎本という男は原岡の質問には答えず、ただ軽蔑的な眼で睨み据える。突然の出来事に、羅江の頭には疑問符が飛ぶ。原岡の助手だと思っていた男が、なぜ彼を批判しているのか、全く見当が付かない。

「何をしに来たんだ。理由も無く実験室に入っただけなことぐらい知っているだろう」

「この少女を解放するためだ」

彼はそう言うなり腰を屈め、素早く原岡の腹を殴った。一瞬の出来事だった。

「げふっ……」

殴られるとは思ってなかったのだろう、原岡は苦痛に顔を歪めた。

「悪いな。だけど、人体実験なんてするもんじゃない」

「こんなことをしてどうなるか、わかってるのか」

呟く程度の音量の、かすれた声で言う原岡。そんな小さな声でさえ、ここでは大きく響く。

「ああ」

崎本は駄目押しに、うめく彼の腹をもう一度殴った。すると、原岡はすぐに床に崩れ落ちていく。崎本はそれを横目で見ながら、羅江の手足の自由を奪っていた器具を外した。解放された羅江は台から降り、ちらりと床に視線を向けた。

「あの、この人は大丈夫なんですか」

「ちょっと眠ってもらってるだけだよ。それより、怖くなかった？」

そう聞かれると、羅江の心の中の何かが決壊した。緊張が解けて安心してしまい、膝の力が抜けてしまった。涙がとめどなく溢れ、いくら拭っても止まらない。

「ありがとうございます。崎本さんがいなかったら……」

「もう大丈夫だから安心して。人体実験なんて、人がすることじゃないよ」

崎本はそう言いながら、柵に無造作に置かれたカルテを手に取り、何とはなしに眺めた。しかし、次の瞬間、崎本の意識はカルテの中へ吸い込まれた。

「何森 羅江……って、羅江ちゃん!？」

「え、何? どういうこと?」

崎本の様子に、羅江の顔には驚きの表情が浮かぶ。外に出ない彼女には、友達はおるか知り合いすらいはないはずだ。

「俺の名前は、崎本 信彦のぶひこ」

羅江は嘘だと思った。まさかそんなことがあるはずが無い。しかし、頭の中にある“のぶひこ”と一致する記憶は、そのまさかなのだ。

「……のぶひこくん、なの？」

頷く彼に、まさかが確信に変わる。あの時の面影が残っているものの、もう男の子じゃないんだなと実感できる。突然の再会に、当時の記憶が鮮明に思い起こされる。

羅江は、昔のことを思い出して感慨に耽ふけりかけて  しかし、頭の中を現実がよぎる。

「信彦くん  ううん、信彦さん。あたし、駄目なの。あたしは普通の人間じゃない」

羅江は俯いた。幸せに暮らせるはずの彼を巻き込むわけにはいかない。

「それがどうしたんだよ」

だから、こんな反応を予想していなかった。泣きたい気持ちを堪えると鼻の奥がツンとして、結局涙が出てくる。

「でも、あたし……」

信彦は、予想外の答えにたじろぐ羅江に笑顔を見せて、そして手を出した。

「行こう、連れて行ってあげるから」

そして、彼女は信彦の手を取った。取ってしまった。彼が不幸になるとわかっていたのに……その暖かな眼差しに負けてしまった。

連れて行って。お願い。

## 子守唄の旋律（メロディ）

大学から出てすぐの大通りを歩いていると、羅江の斜め上から声が降ってきた。

「どこに行きたい？」

羅江はその台詞に目を丸くした。最後に自由が欲しかっただけで本当に大学から逃げられるなんて思っていない。だけど、目の前にいる彼は、本気で大学から逃げるつもりなんだろうか。それは、あまりにも無茶で無謀な考えだ。

「北海道で蟹を食べるのも良いし、沖縄で泳ぐのも楽しいだろ」

「だけど、彼の言い方から『逃げよう』というようなニュアンスは伝わらない。小旅行でもしようという軽い言い方に、羅江は惑わされそうになる。もしかしたら、北海道でも沖縄でも行けるんじゃないか。そんな気持ちになってしまう。

「行きたい。けど、この髪じゃすぐに見つかってしまう」

角度によっては虹色に見える、細く長い髪の毛。羅江は自分のそれを見つめて唇を噛んだ。体の奥にある“欠落”が表面に浮き出してしまうように感じた。

「髪を染めるのはどう？」

「……駄目。あたし、新陳代謝が良くてすぐに髪が伸びてくるの」  
大学で剃られた髪は、既に胸の辺りまで伸びていた。

「じゃあ、髪を結んで帽子に入れるっていうのは？」

「それなら、きっとわからない。髪が帽子から出なければ……」

いつ、レジのお姉さんのような人に会うかわからない。同じ失敗だけはしたくない。数日前の出来事を思い出し、彼女は目を伏せる。  
「羅江ちゃん、大丈夫？」

信彦は俯いていた羅江に心配そうな声を掛ける。そんな彼に、羅江は顔を上げ、心配ないよと笑ってみせた。

二人はヘアゴムと帽子を買い、大きめな公園のベンチに座った。今日は休日なのか、小さな子供たちが鬼ごっこをしたりして遊んでいる。辺りにはカップルがたくさんいて、仲良く笑い合っている。あんな風に見えるかな　羅江はそう思うが、彼女の見た目は十五歳前後だ。せいぜい仲睦まじい兄妹にしか見えないだろう。

信彦は羅江の髪をそつと持ち上げた。遠慮しているのか、丁寧な触れ方に暖かさを感じる。思えば、ここ数日安心なんて出来なかった。しかし、今は誰も邪魔しない。床に倒れている原岡が発見されるのは、まだまだだろう。

自分は、子供のころ以来のつかの間のやすらぎに浸っている。そう実感できたことに、羅江は幸せを感じた。

いつの間にか、うとうととしていたらしい。羅江の上から、柔らかい声が聞こえた。

「はい、できたよ。……行こう」

公園を出て、またさっきの大通りを歩く。羅江は鮮やかに反射する太陽に顔をしかめつつ、店のショーウィンドウに自分の姿を映してみた。

「すごい……上手」

羅江の髪は、きれいなお団子に纏められていた。自分のそれを手で触りながら、羅江は感嘆の声を漏らした。

「こつこつのは得意だからな。よく言われるんだ、『見かけによらず器用』って」

そんなずばらに見えるか？　信彦はそう言いながらおどけてみせた。帽子を被つてくすくすと笑いながら、羅江はその姿を想像した。

「あ」

信彦さんのポケットの中から、何かが振動する変な音がした。信彦さんはポケットから黒い硬い機械を出して、それを眺めた。

「信彦さん、それって何？」

「これ？ これは、携帯電話だよ」

携帯電話 持ち運びできる電話？ 彼女の家に固定電話はあったが、携帯電話は無かった。あんなに小さいのに固定電話と同じ機能があるなんて、固定電話は用済みじゃない。

しかし、信彦はそれを一瞥すると、すぐにポケットに戻してしまった。その動作に、羅江は首を傾げる。

「出ないの？」

「携帯電話は、時に自分の行動を制限される物なんだ」

誰からの電話だったんだろう。聞いてみようとしたが、彼はそれ以上言う気が無いのか、羅江に視線を合わせない。交差点の信号が赤に変わる。

「信彦さん、あたし、電車に乗ってみたい」

信彦は、少し首を捻って視線を泳がせた。我儘ばかりごめんなさいと羅江は心の中で呟く。でも、遠くへ逃げたい。彼の いや、自分のものかもしれない不安が無くなる場所まで逃げてしまいたい。「そつだな、電車に乗ろう」

その言葉を聞き、羅江はそつと息を吐き出した。先ほど赤になっただばかりの信号は、いつ変わるのだろう。

\*\*\*\*\*

「逃げられた!？」

実験棟に男の声が響き渡る。原岡は、予想外に響いた大音量に首をすくめる。

「すみません」

「何をやっているんだ、お前は。欠落種族の少女が脱走を試みないとでも思ったのか」

だったらお前が管理しろよ。そう口が滑りそうになるのを彼は必死で堪える。そんなことを言ったら、クビは決定だ。しかも、この男は血の気が多いから、本当に首を飛ばすかもしれない。

「……すみません」

だから、馬鹿の一つ覚えみたいにその台詞だけを繰り返す。

「お前には言つてなかったんだが、前回の実験であることがわかったんだ」

「な、何ですか」

態度は心もち身を乗り出すだけに留めるが、しかし一字一句聞き逃さないようにする。男は原岡の関心を知っているのか、もったいぶって話し始めた。

「欠落種族に代々伝わっている唄があるそうだ。その唄を聴くと、欠落種族の操り人形同然となるらしい。責任は取れるのか」

原岡には辞職という道しか無いことは明らかなのに、嫌味ったらしく問いかける。その態度が気に食わなかった。だから、彼はこう言った。

「……何森 羅江を捕獲 いえ、保護します」

原岡はこつそりとほくそ笑む。彼女には発信機を付けている。貴重な実験材料を、素直に引き渡すと思ったか。彼の目的は羅江を解剖する、ただそれだけなのだから。

\*\*\*\*\*

信彦は、駅に行くときに見つかるとは思っていた。

しかし、駅は予想以上に混んでいて、背の低い羅江なら滅多なことでは見つからないと安心した。

「信彦さん……！」

雑音の波の中に自分を呼ぶ声が聞こえて、信彦は後ろを振り返る。見ると、羅江は一つの店に心を奪われていた。

そこは駅にありがちな土産屋で、吉備団子やピオーネゼリーなどさまざまな食べ物が陳列されている。しかし、羅江の興味の対象は食べ物ではなかった。

「信彦さん、これ可愛い」

それは小さなクマのキーホルダーで、色によって恋愛運が良くなる、金運が良くなる、などと書いてある。

信彦はそういう物を見るたびに、「ご当地キーホルダーじゃないの」と思うが、このクマだけは素直に可愛いと感じることができた。

「ちよつと待つて。財布があつたはず、あ」

羅江は服のポケットを探つたが、そんなものはどこにも無い。大学にいたときに取られたんだと気づき、羅江は視線を揺らした。

「それくらい俺が出すよ」

そんな彼女の態度に気付いたのか気付かなかったのか、信彦は自分の財布を取り出した。

「でも、そんな」

罪悪感と感じるものの、だったら自分が出せるのかというところではない。彼は社会人なのだから、これくらいなら出してくれるだろう。そう考えてしまう自分自身に羅江は腹が立った。

「俺に買ってもらつて、そんなに嫌？」

「嫌じゃないけど……信彦さんに悪いじゃない」

羅江がそう口にする、信彦は柔らかな微笑んだ。

「そんなこと気にしなくていいよ。何色がいいの？」

「ピンク……」

羅江はあくまでも信彦に頼りたくないようで、しぶしぶ呟いた。

その呟きを聞いた信彦は、ピンクのキーホルダーと水色のキーホルダーを手に取り、さつさと会計を済ませてしまった。

「はい、どうぞ。はは……俺も買っちゃった」

信彦はお揃いにしたかつたとは一切言わず、二匹のクマを揺らしてみせた。

そのまま店を後にした二人は、人ごみに流されながらも券売機までたどり着いた。羅江が改札を抜け信彦と歩いていると、不意に声が掛かった。

「もしもし」

思わず羅江の足に力が入る。しかし、走り出すようなことはしなかった。それをしたら余計怪しまれることは彼女にも予想できた。呼吸を整えて、ゆっくりと振り返る。あくまでも、いつでも逃げ出せるように足の力は抜かず。

「落としましたよ」

白髪の駅員が手に持ったクマを羅江に手渡す。名入れテープの付いたパッケージをポケットにしまいながら、羅江はほっと息を吐いた。大丈夫、この人は自分の正体に気付いていない。

「ありがとうございます」

軽く会釈をしてその場を後にするし、階段を上ってプラットホームへ出る。窓の向こう側の電線にとまっている雀は、啄ついばむように鳴くとさっと飛び立っていった。

駅にはたくさんの方がいたにもかかわらず、そのほとんどは上りの電車を待っていた。二人が下りのプラットホームで壁にもたれかかっていると、静かに電車が滑り込んできた。反対側で待っている人たちが見えなくなる。

車中は予想通りがらで、立っている人はほとんど見当たらなかった。二人はつかまり棒を持って出発を待った。

「ねえ、信彦さんはどうして研究者になろうと思ったの」

羅江は心持ち首を傾げて信彦を見た。当時の彼は活発で、研究者なんていう堅苦しそうな職業とは無縁だと思っていた。

「俺の母さんは、俺が中学生のときに癌で死んだんだ。だから、癌の治療薬を開発しようと思って。そんな簡単にできるはずが無いのにな」

自嘲気味に話す信彦の目は、台詞とは裏腹に強い決意に溢れている。羅江はふっとプラットホームへ目を向ける。そこにいる人たちの中にそんな強い目をした人なんて

「の、信彦さんっ!」

いた!

それを見た羅江は思わず信彦に飛びつき、彼の方向を指で指した。白衣を脱いだ男が向こう側のプラットホームにいた。

「早すぎる……」

信彦は零れる言葉を制御することなく発し、無意識に羅江を守るように包み込む。いや、大丈夫だ、まだ相手は気付いていない。

「大丈夫だよ、羅江ちゃん。ここから離れてしまえばもう安心だから」

信彦は、胸の中で震える羅江に優しく声を投げかけた。しかし、油断せずプラットホームを注視していると、厳しい表情で辺りを捜し回っている原岡と目が合った。はっとした信彦は瞬間的に目を逸らす。しかし、次に視線を戻したとき、そこに原岡はいなかった。歩き回る人の群れが、餌を探す蟻の大群に見える。

『電車が発車いたします』

ブルブルルという音に続けて、プラットホーム内にアナウンスが流れた。並んだ人たちは、条件反射でこちらに視線を向ける。

早く発車してくれという気持ち、それだけが信彦の心を占めていた。そのお陰か、アナウンスが流れたと同時にドアが閉まり、電車は進み出した。

人がいなくなったプラットホームを眺めていると、階段から駆け下りてくる男の姿が見えた。彼は諦めに似た溜め息を吐いて、こちらに視線を向けた。その、じっとりとした蛇のような目に、信彦の背中を冷たいものが流れていった。

電車が発車して約五分、窓の向こう側の景色が田園に変わる頃、車内に羅江の声が落ちた。

「あのね、あたし、大学にいるときに昔の夢を見たの。お母さんがあたしに唄っていた子守唄……あたしがいつも唄っている唄なの」  
そして、その言葉に手繰られたように記憶が溢れ、羅江は息せき切って話し始めた。夢の中で母が子守唄を唄っていたこと、家に大

学関係者が来たこと、母が教授に殺されたこと。

「あたし、わからない。あの唄……どうして」

「羅江ちゃん」

泣き出しそうな顔で首を振る羅江に、信彦は優しく声を投げた。

「お母さんが毎日その子守唄を唄っていたから今も覚えているって  
いうだけじゃないかな。……もしくは」

言いかけて、信彦は口をつぐんだ。しかし、羅江の続きを促す視線に負け、再び口を開いた。

「もしくは、『欠落種族』に関係があることかもしれない」

「信彦さん!？」

悲鳴のような羅江の声を聞き、しかし信彦は考えを否定することはできなかつた。

「羅江ちゃん、君が見た夢は本当の記憶？」

「……………」

「二十年前、連続殺人事件があつた。犯人は死体解剖の結果人間亜種だと言われ、欠落種族と名付けられた。彼女は、君の母親じゃないのか？」

羅江は俯いたままぽつんと呟いた。

「……………あたし、知らない」

信彦は無言で視線を窓の外へ向ける。二人の間にある一步分の距離が、妙に遠いように思えた。

お互い無言になつて十五分ほど経つた頃、突然羅江が声を上げた。

「あ、お花畑……………」

見ると、若草色の絨毯はとくに終わっていて、菜の花の黄色い絨毯が広がっていた。風に揺れてそよぐ菜の花はこれ以上ないほど幻想的だつた。

「信彦さん、次の駅で降りない？」

信彦は外の風景に心を奪われたまま「いいよ」と答えた。

## 子守唄の最終楽章（クライマックス）

かろうじて自動改札口がある程度の小さな駅を出た二人は、大きく息を吸い込んだ。

空は冴え渡り、どこかから小鳥のさえずりが聴こえる。鮮やかな山の隣には、ぽかんと雲があるだけだ。

「日本にこんなところがあつたなんてな」

道路が整備され、ビルばかりが立ち並ぶところとは違う。ここは正に桃源郷　　暗い現実世界と切り離された安息の地。

「羅江ちゃん、ちよつと歩こうよ」

羅江は頷き、二人は黄色い絨毯を歩いていった。陽気な日差しに微笑む菜の花を、爽やかな風が柔らかく揺らす。

無限に続くかのように見えた絨毯にもいつしか終わりが来る。数十分ゆつくりと歩いた彼らは、菜の花の終点で立ち止まった。

「菜の花の色ってとっても暖かい。全てを包み込んでくれる、優しい色」

羅江はそれだけ言ってその場にしゃがみ込んだ。花と同じぐらいの背丈になってみると、まるで自分が花の中に埋まっていると錯覚してしまいそうになる。

「この中に入っつていいかな？」

羅江はそう言つと、信彦の返事も聞かずに奥へ入っつてしまった。信彦が苦笑しながら菜の花を見つめっていると、ふいに何か衣服の裾を引っ張られた。

「こんなところに観光なんて珍しいね。どこから来たの？　名前は？」

日焼けで真っ黒な肌に白いＴシャツを着た女の子は、利発そうな黒い瞳を輝かせて首を傾げた。信彦は少女の好奇心剥き出しの問いに答える。

「木葉大学から来たんだよ。名前は崎本 信彦。……この先には何があるの？」

「街があるよ。あたし、さつき街に行ってきたんだ」

信彦が少女に尋ねると、彼女は得意気な表情を見せた。漆黒だと思っていた髪は風に舞うときらきらと輝いた。

「ありがとうね。じゃあ、おにいちゃんたち、街に行ってくるよ」

木を隠すなら森の中、人が隠れるなら雑踏だろう。さすがに周りが一般人だらけなら、奴も安易に手を出せないはずだ。そんな風に思案を巡らせていると、少女はにっこり微笑んだ。

「また来てね。あたし、この村で一番唄が上手なんだ。今度聴かせてあげるから」

「本当？ じゃあ、楽しみにしてるよ」

「約束だよ。ばいばいー」

そして軽く手を振ると、信彦たちが来た道を駆けていく。それを見ていると、信彦は羅江と遊んでいた頃を思い出した。

ひらひらと飛んできたモンキチョウが、信彦の鼻先を掠めて菜の花に止まる。チョウは羽を数回上下させると、また違う菜の花に飛んでいった。

「ごめんなさい、ちょっと休ませて……」

さっきの場所から歩き始めて早一時間、ようやく道路に出てきた。しかし道路とは名ばかりで、車が通っている様子は無い。

「ちよつとそこのベンチに座ろうか」

二人は鳥の糞を避け、寂れたバス停のベンチに座った。パンパンに緊張していた筋肉が緩み、余裕が無かった表情もほころぶ。

「……あの子は街までずっと歩いたのかな」

羅江の頭をちらちらと行き来する、信彦と話していた少女。声しか聞こえなかったのに、なぜか妙に気になった。

「ねえ、信彦さん」

彼女は言い掛けて、台詞を途中で手放す。問い掛けた相手はベン

手の背もたれに寄り掛かり、眠りに落ちていた。  
大学でもあんまり寝てなかったのかな。羅江はふつと微笑み、信彦の肩に首を傾けると静かに目を閉じた。

\*\*\*\*\*

「ちょっと、お二人さん」

当惑した声と共に体を揺すられ、羅江は目を覚ました。道路には無人のバスがあり、目の前には五十代半ばほどの男性がいる。

「困りますよ、こんな辺鄙へんびなところで寝られちゃあ。さすがに夜は寒いからね、洒落になりませんよ」

渋みのある温厚な顔は彼の人生を語っていた。地球十周分は走っているであろう彼の伴侶は、塗装が剥げて窓は傷まみれになり、それでも凜々しく輝いている。

「でも、向こうの方には街があるんでしょ？　そこから人が来たりしないんですか」

羅江は先ほどの少女を思い出しながら運転手に聞いた。彼女は街から帰っている途中だと言っていたのだ。しかし、彼は予想外といった風に見開いた。

「街……って、もしかしてお嬢ちゃん、街に行くつもりかい？」

羅江が問いに頷くと、運転手はいいやと首を振った。そんな冗談と言わんばかりの表情だ。

「そりゃ無茶だ。連れていってあげるから乗りなさい」

「え、……いいんですか」

「いいんですかって、こっちはそれが商売だからね」

運転手は白い歯をこぼした。確かにそうだと羅江もつられて表情を緩める。そして、まだベンチでまどろんでいる信彦に駆け寄った。

「信彦さん、起きて」

「ん……羅江ちゃん、どうしたんだ？」

「この運転手さんが、街まで連れていってくれるんだって」

その台詞で信彦は立ち上がり、のろのろと会釈をしてバスに乗り込んだ。羅江たちも後に続き、座席に座った運転手はエンジンを掛けた。が、バスはぶすんと間抜けな音を立ててエンジンを止めてしまふ。

「あの、大丈夫ですか」

「心配ないよ。いつものことだからね」

バスは再びエンジンを掛け、道路に滑り込んだ。乗客二人を乗せたバスはその影を東に伸ばし、誰もいない道を走っていった。

広い車内の中に無言が蔓延する。その空気に耐えられなかったのか、運転手は信彦に尋ねた。

「向こうからっていうと、光園ひかりその駅から来たん？」

信彦は光園駅という名前を問い返そうとして、自分たちが降りた駅だと気が付く。

「あ、はい。景色がきれいだから降りてみようと思って」

「確かに、あの菜の花畑に惹かれて降りる人はぎょうさんおるよ」

「じゃあ、その人たちのために、あそこまでバスで来てたんですか」

「そういうことなんじゃけど、大抵の人は見るだけ見たら電車で帰るから、バスなんか使わんよ」

彼との会話に味をしめた運転手は、タクシー並みに饒舌じょうせつだった。

そんなにたくさん話すことが無かった二人は少し戸惑いながら、しかし楽しみながら、その一時の話に花を咲かせた。

それからしばらくすると、外に家が見えるようになってきた。川では鳥が泳ぎ、電線ではスズメが喧嘩をしている。

「もう少ししたら大通りに出るかな」

その言葉は本場で、数分もしないうちにバスは大通りに出てきた。店が立ち並び、制服を着た学生が自転車に乗って談笑している。

「この辺でええかな」

運転手はバス停にバスを止め、羅江たちの方を振り返った。

「本当にありがとうございました」

信彦がバス賃を払おうと財布を出すと、彼はぼろぼろになった運賃表を見た。バスと共に歴史を歩んできた運賃表は、紙が劣化して茶色く褪せている。

「二人で五百六十円」

「……そんなに安かったですか？」

一人分を計算すると二百八十円だ。あまりの安さに信彦は首を傾げた。

「こんなに話したのは久しぶりじゃけん、ちょっとしたおまけじゃ」

「そんな……いいんですか」

「ええつて、気にせんでや」

彼はそう言つてカラカラと笑う。信彦と羅江は目を合わせ、その厚意に甘えることにした。

「じゃあ、ありがとうございます」

信彦は運転手に小銭を渡し、会釈してバスを降りた。羅江も会釈をして、信彦に続いた。

「また暇じゃつたら光園の方にも来てやー」

運転手は最後にそう言い残し、バスを発車させた。

それを見送つた二人は、通りから少し外れた道を歩くことにした。近くに学校があるのだろうか。チャイムの音が聞こえる。あまりにもそれが日常的で、信彦は自分たちが追われている立場だということをおぼえてしまう。

穏やかに照る太陽が、ビルのガラスにキラキラと反射している。

しばらく無言で歩いていると、羅江が意を決したように声を掛けた。

「ねえ、聴いてほしいの。おやすみなさいの子守唄」

信彦は突然の台詞に目を丸くし、言葉の意味を理解すると微かに眉をひそめた。彼女はまた母親の思いに溺れているのだろうか。

彼の胸中を察した羅江は首を振った。瞳を見ると、毅然とした意

志がそこにあつた。信彦は思わず圧倒されてしまつた。

「お母さんのことと、この唄が好きなのは関係ないの。……頭の  
中を巡るだけで心地いい唄なんて他に無い」

「じゃあ、聴かせて。羅江ちゃんが何にとらわれているのか」

羅江は返事の代わりに大きく息を吸い込む。そして、その吸つた  
息と共に音を紡ぎ出した。信彦は、その美しい音色に思わず息をの  
む。

溢れる音に秘められた物哀しさは道行く人の足を止めさせる。雑  
音の無くなつた空間に、混じりけの無い唄だけが響く。

羅江はただ無心で唄い続ける。募つた思いを全て込めて。流れる  
ように大きくなっていく旋律。止まらない もう、止められない  
クレッシェンドに次ぐクレッシェンド。アンダンテからアレグロ  
モデラート……もつと速く。

信彦は縫い付けられたかのように羅江から目が離せなかつた。服  
の裾を握りしめて唄う彼女は、自分の運命を憂いて叫んでいるよう  
だ。しかし、あくまでも音律は優しく穏やかだ。母親が子を思つて  
唄うそれのごとく。

愛してる。

確かに聞こえたその言葉は淡い泡沫で、彼女の唄の全てだった。

信彦は一瞬、母親の胸に抱かれている感覚を思い出した。

「……………」

最後の音を響かせ、唄は終わった。目を開いた羅江はほつと一  
息つく。

その場にいる全ての人が唄の余韻に酔いしれていた。しばらくの  
静寂。それを破つたのは、さきほど放歌高吟した本人だった。

「……………信彦さん！」

ぱちんと泡が弾けるように放心から覚めた信彦は、笑顔で駆け寄  
る羅江に言葉を掛けた。張り詰めていた息を吐き、ゆっくりと吸う。

「すごい……すごかったよ」

言葉にしつくせない感動は月並みな賛辞にしかない。自分の感情をうまく表現できないもどかしさが彼の体を動かした。衝動のまま、目の前にいる羅江を抱き入れる。

羅江は驚きに目を見開いた。信彦は彼女の体が硬直したことに気が付かず、かすれた声でささめく。

「羅江ちゃんの唄、すごくよかった。感動したよ」  
「本当？」

彼女は顔を上げ、嬉しそうにほころばせた。しかし、視線がまともなぶつかってしまい、照れくささを隠すためにポケットに手を入れる。次の瞬間、その笑顔が凍りついた。

「信彦さん。……これって」

羅江はポケットから黒い物体を取り出し、信彦に渡した。それを食い入るように見つめた後、彼は首を振った。

「やられた。発振器だよ」  
「あたしがもつと早く気付いていれば」

「ごめんなさいと申いた羅江は、目に涙を浮かべて俯く。信彦は彼女の肩を優しく抱いた。

「羅江ちゃんのせいじゃないよ。俺だって全然気付かなかったんだから。それより今は」

発振器が付いていたとわかれば、いつまでもこの場に留まっていことは出来ない。信彦は辺りを見渡し、様子がおかしいことに気が付いた。突然言葉を途切れさせた彼に、羅江も顔を上げる。そして、二人は絶句した。

つい先ほどまで騒がしかった路地は静まり返っている。突っ立っている人々の目に意思はなく、ぽっかりと穴があいているようだ。時は止まっていて、自分たちだけが取り残されている。そんな考えが頭に浮かんだが、信彦はすぐに首を振った。ありえない。

「嫌だ、怖い……」

羅江はぎゅっと信彦の服を掴む。彼はその上に静かに手を添えた。

太陽を地平線が遮り、地上の影をも溶かしてしまう。ビルのガラスはもう何も映さない。

「崎本！」

突然、この場にそぐわない大声が聞こえる。二人が振り反ると、そこには原岡が立っていた。

どうしてという疑問が頭に浮かんで消える。羅江のポケットに発振器があった。疑問に対する答えはそれだけで十分だ。

羅江の頭の中で大学での記憶が甦る。身動きの出来ない体に突き付けられる、鈍く光るメス。彼女は自分の口が渴くのを感じた。

「……何の用だ、原岡」

信彦の声色が低くなる。しかし原岡は彼には見向きもせず、羅江を見やった。

「お前に用は無い。用があるのはその欠落種族にだ」

冷やかな目と視線が合い、彼女はびくんと体を揺らす。ふっと首元を抜けていく風は妙に冷たかった。

「お前、唄ったな？」

羅江に悪いことをしたという自覚は無いのに、彼の言い方は彼女を責めている。羅江は原岡の見透かしたような台詞に混乱した。

「羅江ちゃんが何を歌おうと、それは彼女の自由だろう」

信彦は羅江を庇うように前に出て原岡を睨め付ける。彼の声は震えていて、怒りを抑えていることがわかった。羅江は原岡の目から視線を外す。

「そうか、だったら教えてやろう。……その唄は、欠落種族に伝わる悪魔の唄だ。聴いた者は自我を失い、欠落種族の操り人形となる」

はじめからわかっていただけのかもしれない。羅江は腹岡の言葉を聞いても驚かなかった。それよりも、子守唄を悪魔の唄と罵られたことが彼女を不快にした。

「お母さんの子守唄を悪く言わないで！」

信彦さん、あの唄を聴いたあなただったら、あたしの気持ちをわかってくれるでしょう？ 羅江はそう言いかけて、彼の口からこぼれる不明瞭な言葉に気付いた。

「そんな……この唄が……」

信彦の肩は不自然に揺れている。彼が動揺しているのは、後ろから見ても明らかだった。羅江の目が大きく見開かれる。

「崎本、今ならまだ間に合う。欠落種族に操られるな」

「……嘘よ。信彦さんはこの唄のことを褒めてくれた」

「まだわからないのか？ 操られるというのは、お前の望み通りに行動するということだ」

彼の台詞を理解した羅江は、がっくりと膝を折った。言葉にならない言葉が唇からこぼれる。信彦は、打ちのめされた彼女に駆け寄った。

「羅江ちゃんの子守唄は俺の心を動かしたよ。この感情は操られてなんかいない」

羅江は何も言わずに首を振る。感情という本人でも把握できない代物の真偽なんてわからない。なぜなら、羅江は自分の唄を信彦に認めてほしいと思ったから。

「一度でも唄を聴いた者は、彼女の感情に従って一生を過ごさなければならぬ。これが悪魔の唄でなくて何なんだ」

否定は不可能だった。羅江は納得してしまったのだ。自分があの唄を唄ったことで、多くの人の人生を変えてしまったことに。

「原岡さん」

羅江は立ち上がり、原岡の前まで歩み寄ると顔を上げた。彼女の意志の宿った目に、原岡は思わずたじろぐ。

「あたしが死ねば、その人たちを操ることはできないんですよ」

「羅江ちゃん！」

信彦の叫声を聞いた羅江はそれを黙殺し、原岡の返答を待った。信彦の感情が信じられなくなった今、信用できるのが敵対する原岡

ただだということ、なんという皮肉なのだろう。

「…………お前、死ぬ気か？」

「あたしの唄を聴いた人が元に戻るなら」

原岡は、自分の胸が歓喜に震えるのを感じた。これこそ自分が待ち望んでいたものだった。羅江をうまく唆<sup>そそのか</sup>して警戒心を解けば、欠落種族の生体解剖が実現する。もう失敗は犯さない。

「お前の質問の答えはイエスだ。主を失った操り人形は糸が切れるだけさ」

「そう…………。だったら、あたしがすることは決まってる」

羅江は、原岡が何かを言うより先に、そつと息を吸い込む。子守唄の暗示を自分にかけて自殺する。彼女はその唄なしに死ぬ気は無かった。

二度目の子守唄は先ほどとは別物のようだった。原岡は自分の思慮が浅かったことに気付き、唇を噛み締める。この唄が終わった後、生きた彼女に会うことは無いだろう。

ラメンタービレ、哀しい子守唄。理由は哀しい運命を持って生まれてしまったから。

声を潜めるようなピアノはメゾピアノへ。そして、さらに大きなフォルテが響き渡る。

フォルテ…………うっん、もっと強く　クレッシェンド！

羅江の唄は、もはや子守唄とは言えないほどの激しさを持つ。留まることを知らない感情の波。

体中でうねる大きなメロディ。その最後の音が響き、墮ちる。自らを殺めるために。羅江の目から涙が、制御されることなく流れ落ちる。

信彦さん、ありがとう。そして、おやすみなさい。彼女はその唄に自身を任せた。

## エピローグ 全てが終わった直後

しかし、唄が終わった後、生きた人間は誰一人としていなかった。羅江の唄を最後に、音という音全てが消失する。

彼女の感情は人一人を殺すには甚大だった。羅江は、自分の強すぎる感情が周囲に与える影響を考えることができなかった。

死んだ町に一陣の風が吹き抜ける。冷たくなっていく屍を満月が照らしていた。

\*\*\*\*\*

「中村教授、連日の記者会見お疲れ様でした」

「あのような実験を知っていて止めなかったのは私の責任だ。責められるのも当然だろう」

書類をまとめた中村に、部下の男が声を掛ける。デスクの上にはパソコンが置かれており、画面には無数のデータが入力されている。

「死亡者は何人だったんですか」

「何森 羅江を含めて十八人。うち二人はこの大学の者だ」

「崎本先輩と原岡先輩ですよね」

棟は違うが、中村はどちらとも付き合いがあった。二人とも意欲があつたから有望株だったのに、その道は途絶えてしまったのだ。

中村は彼らの輝かしい将来を思い、溜め息を吐いた。

しかし考えてみると、二十年ほど前に同じような事件があった。教授はその事件で欠落種族を発見し、中村はそのときの不明の物質を忘れることができなくなった。彼女の母親による大量殺人事件。

中村は無意識に言葉をこぼす。

「悲劇は繰り返される……か」

そういえば、欠落種族には唄があるそうだ。それを聴くと欠落種

族の思うままに操られると、実験棟監督の男が言っていたのを思い出した。

彼女はそれを唄ったのだろうか。逃げ場が無いと感じ、辺りを巻き込んで自殺しようと考えたのか。その中には、自分を助けた男もいたというのに……所詮、欠落種族か。

思考の迷宮に陥る前に、中村は頭を振った。職業柄、何かあるとすぐに深く考え込んでしまう。妻にも言われたではないか、「もう少しよつと単純に生きてたらどうなの？ あなたは真面目すぎるわ」と心を現実に戻した彼は、部下の姿が無いことに気が付いた。部屋を見渡すと机の影に男の足が見える。中村は苦笑した。

「まったく、こんなところで転ぶなよ」

しかし、返答は無い。不審に思った中村が机を覗こうとした刹那、鈍い衝撃を感じて彼の意識は途切れた。

「何 あの人、死んだの？」

倒れた男二人を前にして、少女は呆然と呟いた。虹色がかった黒い髪、日に焼けた小麦色の肌。齡十歳ほどの彼女は、信彦が大学の名前を言っていたを思い出して訪れてみたのだ。しかし、そこで聞いた事実は信じ難いものだった。

「あたしの唄を聴いてくれるって約束したのに」

悲しげに目を伏せ、そして彼女は唄い上げる。羅江とは違う旋律が部屋中に鳴り渡った。少女はすぐに唄を終わらせ、静まった部屋で時を待つ。

音も立てずにむくりと起き上がった研究員二人の濁った瞳を見つめ、少女は尋ねた。彼らの目とは正反対の、期待に輝いた目で。

「ね、彼の死体はどこ？」

END

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6295r/>

---

おやすみなさいの子守唄 改

2011年3月15日14時55分発行